

## 茅ヶ崎市立松浪小学校

研究テーマ：自ら学び、挑戦する子を目指して

### 1 実践の目的

#### (1) 児童の実態

松浪小学校は、既習内容を理解し、基礎的な知識や技能が身に付いている児童が多い。そして、素直に授業者の指示を聞き、課題に取り組むことができる。一方で、与えられた課題には意欲的に取り組むことができるが、学習をさらに深めるための課題を自ら見出したり設定したりすることには難しさが見られる。また、失敗を避けようとする気持ちが強く、新しい方法や見通しが立たない課題に対しては挑戦をためらう姿が見られる。

#### (2) 目指す児童の姿

松浪小学校の児童の実態を教員全体で話し合い、「自ら学び、挑戦する子」を授業で育てることを目指して実践を進めていくこととした。

### 2 実践の内容

#### (1) 研究の概要

講師に早稲田大学准教授の大村龍太郎先生をお招きし、助言をいただき研究を進めている。校内研究は、「教材研究日」「学年研究日」「授業案検討会」「校内研究日」で構成されている。

##### ・「教材研究日」

放課後に会議等の予定を入れず、個人で授業研究や授業準備を行う。

##### ・「学年研究日」

学年内で授業検討を行ったり、他学年の提

案授業についても指導案を事前に確認したりして、参観時の視点を共有する。

##### ・「授業案検討会」

指導主事を招聘し、提案授業を行う学年を中心に、研究部や希望者が参加して、授業をより深めるための事前検討を行う。

##### ・「校内研究日」

年3回、2学年ずつ提案授業を行う。提案授業の後は、協議会と大村先生の講演を行う。

#### (2) 目指す児童の姿の共有化と明確化

松浪小学校は、児童数が1000人を超え、授業を行う教員も多く在籍している。これまで「自ら学び、挑戦する子」を授業を通して育成することを目指して、3年間校内研究を進めてきたが、授業づくりや評価の視点にばらつきが見られる場面もあった。そこで、校内研究の方向性をより統一するために、「自ら学び、挑戦する」とは具体的にどのような児童の姿を指すのかを明確にすることにした。

本校では、「自ら学び、挑戦する子」の姿を、

・興味・関心をもって、主体的に学習課題に取り組む姿

・自分の学びや行動を客観的に振り返り、より良くなろうと試行錯誤する姿と捉えることとした。

#### (3) 授業づくりで大切にすること

本校では、児童の「自ら学び、挑戦する姿」を大切にしていることから、教員自身も授業づくりにおいて挑戦する姿勢を大切にし

ている。教員一人一人の持ち味や強みを生かしながら、目指す児童の姿を育成するため、指導方法は一様ではなく、多様なアプローチを認め合い、実践している。大村先生の助言から、多様なアプローチを大切にしつつも、授業づくりにおいて共有していることが3つある。

- ・児童が「知りたい」「できるようになりたい」「なぞを解き明かしたい」といった思いをもてるよう、導入や教材・対象との出会わせ方を工夫し、問いや学習の目的が児童自身の中に生まれるようにする。

- ・授業の中で、自分で取り組み方を選んだり、解決したいことや調べたいことを決めたりする機会を設け、学びのコントロールを児童に委ねていく。

- ・児童が自分の学習を振り返ったり、進め方を調整したりする場を意図的に設定し、自己調整力を高めていく。

#### (4) 協議会

今年度から、学習指導案に「研究テーマとのつながり」という項目を新たに設け、本時における目指す児童の姿を記入することとした。これにより、授業者は本時で目指す「自ら学び、挑戦する姿」を明確にすることができた。また、参観者は授業者の意図や願いを受け取り、協議会において本時で目指す児童の姿を共有しながら、授業について協議を深めることができるようになった。

### 3 実践の成果と課題

「自ら学び、挑戦する子」の姿を具体的に示し、教員間で共有したことで、授業づくりや協議会において、目指す児童の姿を共通の視点として捉えながら授業を考えることができるようになってきた。

学習指導案に「研究テーマとのつながり」を位置付けたことにより、授業者は本時で育てたい児童の姿を明確に意識しながら授業を構想し、参観者も児童の具体的な姿をもとに協議を行う場面が増えてきている。

また、授業づくりにおいて各クラスの児童の実態を大切にし、多様なアプローチで授業改善に取り組む姿勢が見られるようになってきた。

### 4 今後の展開

児童の変化を捉える方法として、アンケートなどの数値を用いて児童の変化を示すことは、一つの見方として意義があると考えている。しかし、子どもの成長は一直線に伸びていくものではなく、揺れ戻りながら時間をかけて少しずつ積み重なっていくものである。

また、「挑戦できるようになりましたか」というアンケート項目だけでは、児童が本当に挑戦する姿勢を身に付けているかを十分に捉えることは難しいと考える。

そのため、本研究では、数値による成果の提示だけに依存するのではなく、授業の中で見られた児童の具体的な姿を通して、子どもの変化や成長の過程を捉えていくことを大切にしていこう。

日々の授業や学校生活の中で見られる子どもの小さな変化や一歩を、その子自身の中での成長として丁寧に見取り、実践を積み重ねていくことを通して、「自ら学び、挑戦する子」の育成につなげていきたい。